

学校がもたない・・・

※PJ=プロジェクト

前回の最後に『「先生が見

童生徒を教える」という大前提が揺らぐ状況が、全国の学校で見られる』と書きました。その後、何人かの方に「それってどういうこと？」と聞かれたので今月はその内容についてお伝えします。

先生がいらない

令和5年4月1日時点で、安平町の学校は先生の人数を満たすことができませんでした。

「満たしていないと言っても、担任の先生はいましたよ」

確かに担任の先生は揃いました。でも学校は担任の先生だけではありません。小学校だと担任外の先生、中学校だと教科や副担任の先生が必要

で、それがすべて揃わなかったのです。

「どうしてそうなるの？」

そう思うでしょう。学校の先生は、安平町が採用するのではなく、北海道が採用し、北海道（正確には胆振教育局）が、市町村の各学校に先生を配置します。その配置する先生の人数が足りないため、このような状況になるのです。

「毎年、先生を採用しているのになんでなの？」

採用しています。でもそれ以上に先生が必要なのです。

・ 特別支援学級の増加
・ 産休、育休、病休の増加
こういった状況で見込み以上に先生が必要になっています。

「それなら、たくさん採用すればいいのに」

そうなのですが、そもそも先生のなり手が激減しています。昨年度実施の北海道小学校教員の倍率は1.3倍。中学校教員を含めても2.1倍です。

今までも先生が不足する状況はあったのですが、以前は倍率が7倍〜10倍はあったので、試験の不合格者から期限付で臨時の先生を配置できました。しかし、近年は倍率が下がったため、そもそも臨時の先生自体がいらない状況になっています。

若者が教師を目指さない

なり手不足の要因の一つに、若者が教師を目指さなくなったことが挙げられます。その理由としてあるのが多忙な学校現場です。他の職種に比べても非常に労働時間が長く、いわゆる「ブラック」な職種のイメージが広がっている点も大いにあります。

「学校だから」でいいの？

そういう自分もかつて教員でした。18年ぶりに学校現場に戻ると当時は当たり前だと感じていたことが民間や行政を経験し、一般社会とは違うことに気づきました。そして、先生も地域の方も、「学校だから」ということで、一般社会と違うことがそのままになっている気がします。左のページにある図は、先生の一日のイメージです。誰かの一日ではなく、こんな感じで働いています。

